

人参湯

傷寒論・金匱要略

組成	人参・甘草・朮各3.0, 乾姜2.0~3.0
主治	中焦虚寒
効能	温中祛寒, 補気健脾

プロフィール

この処方の出典は2つあり、1つは『傷寒論』霍亂病篇の理中丸で、もう1つは『金匱要略』胸痹門の人参湯である。両処方ともに人参・甘草・朮・乾姜各三両を用いる。理中丸はこれらの生薬を粉末にして蜜で鶏子黄大の丸薬とし、1回ごとに沸騰したお湯に1日に3回服用する（宋版では1日に3~4服、夜2服とある）。人参湯は、そのまま普通に煎じて3回に分服する。両者の薬効の違いについて明確に書いたものはないが、現在は、煎剤の人参湯を用いる。医療用漢方製剤も同様である。

方解

主薬は乾姜で、その辛熱で中焦を温めて陽気を振奮し、寒邪を去ることによって冷えによる腹痛や嘔吐を止める。人参は脾胃の気を補って昇清降濁の機能を回復させる。朮は健脾燥湿作用によって人参の働きを助け、甘草は益気して中焦を和し、同時に諸薬を調和する。全体で、温中散寒・補気健脾することによって、裏寒による脾胃の運化と昇降の失調を回復させる。

四診上の特徴

山田は「体格、体質ともに虚弱な人が多く、体力が低下している状態で用いる機会が多い。腹診では腹部全体の緊張力が弱く、腹壁が軟弱である。そして心窩部に振水音を認めるのが人参湯の正証である。時には痩せていて腹壁は薄い¹⁾、薄い板を張ったように硬くなっていることもある。」と述べている¹⁾。

大塚は、人参湯の使用目標を下記のようにまとめている²⁾。

1. 顔色の蒼いこと。血色が悪くて生気のない人が多い。平素強健な人でも、病気に罹って人参湯証を呈するようになると、生気を亡い血色が悪くなる。
2. 唾液が希薄で口内にたまる傾向がある。従って口渴を訴えることがあっても舌は必ず湿濡している。舌苔のあることは稀である。また、咳嗽のある場合には、希薄な痰が多く出る。
3. 小便自利を訴える者が多い。下痢をしている場合は小便不利になることが普通であり、浮腫のある場合も亦小便不利になることが通例であるが、人参湯証では下痢をしても小便自利の傾向があり、浮腫があっても小便自利の症状があるものが多い。また足が冷えると小便が近くなると言うのも人参湯の一つの目標となる。
4. 手足の厥冷を訴える者が多い。人参湯証の患者は手足の厥冷を訴え、そのために頭重、不眠を訴える者すらある。
5. 目眩を訴える者が多い。
6. 心下痞硬、心胸痛、胸満等の症状がある。腹診するに腹壁

が一体に膨満して軟弱で胃内停水を証明するものと、腹直筋を板の如く触れるものとある。

7. 浮腫のある者がある。これは虚腫に属する者で、指圧により陥凹して中々隆起してこない場合が多く、皮膚の栄養悪く小便自利の傾向がある。
8. 出血をきたす者がある。咯血、吐血、子宮出血、衄血などいずれの場所から出血してもよいが、黄連や地黄のゆく場合と厳重に鑑別しなければならない。それには他の症状をよく観察することが必要である。
9. 嘔吐、下痢或いは便秘を来すことがある。
10. 身体疼痛を訴えることもある。
11. 脈は遅緩、或いは遅弱のものと弦細のものが多い。

使用上の注意

服用初期に浮腫が出現することがあり、これは甘草の影響と考えられるが、はっきりしない。大塚は「人参湯を数回飲んでいううちに浮腫が現れることがある。これは良い徴候であるが、この浮腫を早く去ろうと思えば五苓散を与えようとい。2~3日の服用でよくなる。」と述べている³⁾。

臨床応用

人参湯は裏寒を目標に用いることで、消化器症状のみならず幅広い応用が期待できる。また附子を加味（附子理中湯）したり、真武湯と合方して茯苓四逆湯の代わりに用いるなど、他剤との合方もしばしば行われる。

消化器疾患

食欲不振や胃痛、嘔気・嘔吐、下痢・便秘などの消化器症状と冷えを認める例に人参湯を投与すると、冷えと同時に諸症状が軽快することはよく経験する。

織部は、虚証の人が冷たいものを取りすぎて人参湯証になるケースが多いとし⁴⁾、大宣見は、心身症が増悪する際にアイスクリームやチョコレートを過食して食欲不振や嘔気を訴える女児に、食事指導と人参湯を投与して治癒させたと述べている⁵⁾。

また、『傷寒論』の条文にあるように、薄い唾液が止めどもなく流出する場合（喜唾）に人参湯を投与すると改善する場合がある。松田による典型例では、2週間で喜唾が消失し、胃痛も軽快したと述べている⁶⁾。

慢性胃炎や機能性胃腸症にも頻用されているが、一般的すぎるのか症例報告などはない。松本らは、胃下垂の患者に対しインジゴカルミンの排泄能やCornell Medical Indexを検討した。その結果、CMIのI、II領域に人参湯証の患者が多く、人参湯投与でインジゴカルミン排泄能は改善し、愁訴も改善したと報告

している⁷⁾。高山は診察や胃透視をして、胃腸の動きが活発でバリウムの排泄が早く、日常食物の胃内停滞時間が短いと思われる症例には半夏瀉心湯を、その逆の傾向を呈する症例には人参湯を投与している。腹診では半夏瀉心湯の患者では温かく、人参湯では何かヒンヤリしていると述べている⁸⁾。松田は胃切後16年続いているダンピング症候群の、食後の嘔気、腹痛、下痢に対し人参湯が有効であったと述べている⁹⁾。

人参湯を使用の際には、冷えや易疲労感を目標とする¹⁰⁾。山田は「胃腸型感冒では体温が上昇しても寒気が強く、お腹が張ったり痛んだり、嘔吐したりする病態や、裏寒証でお腹が冷えている病態に温めて治療する働きがある。」と述べている¹¹⁾。

また、乳児¹¹⁾から高齢者まで投与され、いずれも心窩部の冷え、心下痞硬、下痢しやすい、冷飲食¹²⁾などの徴候を参考に用いて、数日から数週で下痢が改善した報告がある。高木は潰瘍性大腸炎による下痢に対して、心下痞硬などの所見を目標に人参湯を投与し、良好なコントロールを得ている2例と¹³⁾、若い頃からの日に数回の下痢が、人参湯加附子を1回内服しただけで改善した高齢者の1例を報告している¹⁴⁾。

過敏性腸症候群の治療薬として、人参湯は各書に記載があるが報告は少ない。龍野は29例中成人の3例に本方を使用し、2例は有効、1例はやや有効であったと報告している¹⁵⁾。また、大石は2例の小児に用いて¹⁶⁾、高木は成人男性で有効であったと述べている¹⁷⁾。

呼吸器・上気道疾患

福田らは心下痞硬と心下冷を目標に慢性閉塞性肺疾患と間質性肺炎の患者に人参湯を投与した結果、消化器症状と同時に呼吸器症状が軽快したと報告している¹⁸⁾。さらに阿南らも1例、同様な報告をしている¹⁹⁾。龍野は、感冒後に痰が切れない症例に用いた報告をしている²⁰⁾。

三瀧は、感冒後の気管支炎に対して人参湯を用いたと述べている。虚弱な老婦人のこじれた感冒に対し、心下の冷えを目標として投与したところ、日頃は1ヵ月続く咳が3日で治癒したとのことであった²¹⁾。織部も感冒後1ヵ月続く咳に対して本方を用いて2日で70%改善し、14日後には治癒した例を報告し、人参湯は甘草と乾姜を含み、甘草乾姜湯の方意があるため有効であったと考察している²²⁾。また、陣内は風邪を引きやすい5例に人参湯を用いたところ、風邪を引かなくなったと報告している²³⁾。

その他

胸痹に対する使用報告がある。山田は「胸が痛い時、肋間神経痛の時に心臓が悪くなったのではないかと心配する人がいますが、そういう痛みではなく狭心症に似た胸の何となく締め付けられる痛みの時で胃の悪い時です。」と述べ²⁴⁾、狭心症様の痛みを自覚した同僚に対し、心下痞硬と弱い振水音を目標に人参湯を用いて軽快したと述べている²⁵⁾。

松田は、蕁麻疹が改善しなかった女性に対し、強い疲労を目標に人参湯を併用したところ著効を得た症例を報告している²⁶⁾。

婦人科疾患では、悪阻と帯下、冷え症、不妊症に用いることがある。当帰芍薬散との合方がしばしば行われている。大塚は、妊娠悪阻の症例を報告している²⁾。また、大塚²⁷⁾と龍野²⁸⁾は帯下に対する報告をしている。どちらも水様の帯下が多い患者で冷え症であった。裏寒があると判断し人参湯を投与したところ、1週間以内にどちらも改善したと述べている。また、冷え症では高木が四肢の冷えに有効だった1例を報告している²⁹⁾。不妊症でも高

木が人参湯単独の報告をしている²⁹⁾ほかは当帰芍薬散との³⁰⁾、男性不妊に対しては八味地黄丸との併用³¹⁾が知られている。

円形脱毛症に対しても有効なことがある。小田口らや高木は腹証から人参湯を選択し、発毛が生じた1例を報告している³²⁾。特に高木の症例は体力が付いてきた4ヵ月目に効果をみている¹⁷⁾。

岩田らは脾胃に問題があるアレルギー性鼻炎の2例に対し人参湯を投与し、鼻炎症状のみならず湿疹や蕁麻疹などの皮膚症状や冷え、易疲労感なども改善したと述べている³³⁾。さらに高木は耳鳴りの患者2例に対し、人参湯合真武湯、附子理中湯が奏効したと報告している³⁴⁾。

また、河野は虚弱体質の中学生の男児³⁵⁾、盛らは慢性疲労症候群の治療報告で2例が人参湯で軽快したと述べている³⁶⁾。高木は転移性肺癌に対し、抗癌性生薬を併用して加療したところ進行が抑制されていると報告している¹⁴⁾。

【参考文献】

- 1) 山田光胤: 勿誤葉室方函口訣解説(96), 漢方医学講座 29: 35-41, 1983
- 2) 大塚敬節: 人参湯に就て(二), 漢方と漢薬 5: 109-120, 1938
- 3) 大塚敬節: 漢方診療三十年, 創元社: 206-207, 1959
- 4) 織部和宏 ほか: 東洞先生はそうおっしゃいますか(8), 月刊漢方療法 15: 670-675, 2011
- 5) 大宣見義夫: 消化器症状を訴える3症例にみる漢方治療と心身医療のはざまの病態, 小児東洋医学会誌 25: 58-63, 2013
- 6) 松田邦夫: 治験録(101), 活 34: 13-15, 1992
- 7) 松本 裕 ほか: 胃下垂症と胃排出機能に関する研究, 診療と新薬 14: 1463-1469, 1977
- 8) 高山宏世: めんげん 腹は温いか冷たいか?, 福岡医師漢方研究会会報 1: 11, 1980
- 9) 松田邦夫: 治験録(93), 活 33: 55-57, 1991
- 10) 松田邦夫: 治験録(36), 活 28: 2, 1986
- 11) 大塚敬節: 小児治験八例, 漢方と漢薬 7: 848-851, 1940
- 12) 岡本光石: 現代における霍乱の治療について, 現代東洋医学(臨増) 6: 80-81, 1985
- 13) 高木嘉子: ヨシコクリニック治験19, 月刊漢方療法 12: 144-152, 2008
- 14) 高木嘉子: ヨシコクリニック治験81, 月刊漢方療法 17: 920-922, 2014
- 15) 龍野一雄: 易刺激性腸の臨床経験, 日東医誌 18: 129-134, 1967
- 16) 大石 興: 人参湯が有効であった過敏性腸症候群の2例, 小児疾患の身近な漢方治療 4: 84-88, 2005
- 17) 高木嘉子: ヨシコクリニック治験37, 月刊漢方療法 13: 924-926, 2010
- 18) 福田秀彦 ほか: COPD、間質性肺炎に伴う諸症状に対して人参湯が有効だった3症例, 日東医誌 63: 261-265, 2012
- 19) 阿南栄一郎 ほか: 肺中冷や脾気虚の改善がCOPDの呼吸症状の改善に寄与した2例の検討, 漢方の臨床 62: 1481-1490, 2015
- 20) 龍野一雄: 治験例, 漢方の臨床 2: 430-434, 1955
- 21) 三瀧忠道: 急性期における漢方治療, 日東医誌 62: 172-195, 2011
- 22) 織部和宏: 頑固な咳と漢方療法, 漢方と診療 3: 288-289, 2012
- 23) 陣内弘和: かぜ症候群に対する人参湯の予防的使用経験, 漢方の臨床 49: 1046-1048, 2002
- 24) 山田光胤: 『金匱要略講話』講義(15), 活 45: 166-173, 2003
- 25) 山田光胤: 荀庵ひとりとこと(122), 月刊漢方療法 11: 190-191, 2007
- 26) 松田邦夫: 治験録(22), 活 27: 3, 1985
- 27) 大塚敬節: 治験, 漢方と漢薬 10: 802-804, 1943
- 28) 龍野一雄: 治験例, 東洋医学 1: 157-159, 1950
- 29) 高木嘉子: ヨシコクリニック治験38, 月刊漢方療法 14: 42-46, 2010
- 30) 織部和宏 ほか: 東洞先生はそうおっしゃいますか(17), 月刊漢方療法 16: 418-423, 2012
- 31) 保母光彦 ほか: 八味地黄丸、人参湯にて成功した男性不妊の1例, 現代東洋医学(臨増) 6: 150-151, 1985
- 32) 小田口浩 ほか: 円形脱毛症に人参湯加味方が効果を示した症例, 漢方の臨床 54: 942-946, 2007
- 33) 岩田潤二郎 ほか: アレルギー性鼻炎に対する人参湯の治験, 日東医誌 34: 189-191, 1983
- 34) 高木嘉子: ヨシコクリニック治験51, 月刊漢方療法 15: 126-129, 2011
- 35) 河野 順: 漢方体験記(22), 漢方の臨床 29: 177-178, 1982
- 36) 盛 克己 ほか: 慢性疲労症候群に対する漢方治療の効果, 漢方の臨床 55: 847-861, 2008